

## 電子メディア社会における情報遺漏のリスク認知に関する社会心理学的研究(1)\* —情報遺漏のリスク認知尺度の開発—

藤原 武 弘\*\*  
池内 裕 美\*\*\*  
脇本 忍\*\*\*\*

高度情報化社会への移行期に発生する諸問題として、情報化の「光」と「影」の両面が指摘されている(郵政省、1985)。たとえば、個人・家庭の領域で発生する「影」の面として、論理的思考能力の低下の懸念、テクノストレスや不安の高まり、人とのつきあいをわずらわしく思う人間の増加、情報過多に伴う情報の取捨選択の困難、個人・家庭のプライバシーの侵害、匿名性の喪失、また、社会生活における「影」の面として、教育の画一化、医療事故の発生、医療・健康データベースの誤・悪用、医療・介護サービスにおけるふれあい感の欠如、情報を利用する機会の格差の増大、住民プライバシーの侵害、各種機能の大都市への集中化、システム・ダウン、データの誤・悪用による社会的混乱の発生等が挙げられている。

私たちの身の回りを振り返って見ても、高度情報化社会の到来を生活実感として感じることができる。たとえば、パソコン通信、携帯電話、ポケットベル等の電子メディアを用いた情報通信に革新や変容が生じつつある。こうした情報通信の革新は、私たちの生活に様々な影響を及ぼしている。プラスの面としては、瞬時に情報が送れる、世界の情報にアクセスできる、異なる空間で同時に情報を共有できる、取り出したい時にいつでも情報が得られる、といった点を挙げることができる。こうした点は、私たちの生活を豊かに、あるいは便利にしてきた「光」の面である。それに対して、個人情報に他人に漏れる、盗聴される、著作権が侵される、プライバシーが守られないといった、

マイナスの面も存在する。これら「影」は、私たちの生活を脅かし、不安に満ちたものにする危険性がある。

ところで環境ハザード(environmental hazard)とは、環境に関わる危険あるいは危険物の意味で、それは人命、資産、社会的経済的活動に多大の被害を与える事象である。こうした一定のハザード並びにハザードの結果の規模についての確率、頻度、生起の混合物はリスクと定義されている。科学技術の発達に伴う様々な事象や対象に対する危険を人々がどのように知覚しているのかという、リスク・パーセプション(リスク認知)の構造を実証的に初めて明らかにしたのはSlovic(1987)である。彼は「恐ろしさ」、「未知性」、「災害の規模」の三つの次元からリスク認知がなされることを明らかにしている。

Slovicを始めとする、リスク認知の研究では、大規模の範囲の事象や対象が主として取り上げられてきた。しかし、高度情報化社会の「影」の側面に関しては、ほとんど研究の光があてられていない。そこで本研究では、情報の遺漏といった、限られた分野や局面で人々がこの問題に対してどのようにリスク認知しているのかを探索的に明らかにする。

### 方法

調査対象者 大学生198名(男性68名、女性130名)。

調査内容 1) 情報遺漏のリスク認知の測定 予備

\*キーワード：電子メディア社会、リスク認知、情報遺漏

\*\*関西学院大学社会学部教授

\*\*\*関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

\*\*\*\*ECC コンピュータ学院非常勤講師

調査で「自分のことで他人に秘密にしておきたいこと」を243名の大学生に自由記述させた結果と岩田(1987)のプライバシー志向性尺度の研究を参考にして、34項目からなるリスク認知尺度を作成した。具体的には、情報遺漏事象への恐ろしさを「非常に恐ろしく感じる」から「全く恐ろしく感じない」までの7段階で評定を求めた。また、それぞれの項目が将来起こると予想される確率を0%から100%で評価させた。

2) 情報機器利用能力尺度 鈴木ら(1992)が開発した、メディア・リテラシーを測定するための尺度で、下記の16項目からなる(川上,1996)。

1 あなたは、テレビの本体とアンテナ端子とを接続できますか。

2 あなたは、自分でみたいビデオテープが再生できますか。

3 ビデオカメラの撮影中に、突然ビデオテープが動かなくなったら、あなたならどうしますか。

4 あなたは、ビデオカメラで撮影したビデオテープを再生できますか。

5 あなたは、ラジカセのリモコンを使って、カセットテープを再生できますか。

6 あなたは、CDの聴きたい曲をプログラムして聴くことができますか。

7 コピー機の紙が切れた場合、自分で補充できますか。

8 ファックスの調子が悪いとき、あなたはどう対処なさいますか。

9 あなたは、ポケットベルを持っている人と連絡をとることができますか。

10 あなたは、多機能電話のインタホン機能を使うことができますか。

11 あなたは、電卓のメモリー機能をつかって集計計算やカッコのついた数式の計算ができますか。

12 あなたは、電子手帳のカレンダー機能を使うことができますか。

13 あなたは、電子手帳にスケジュールを入力することができますか。

14 あなたは、ワープロの文書を保存し、呼び出してくることができますか。

15 あなたは、ワープロの検索機能を使って文

書の中から必要な部分を捜し出すことができますか。

16 あなたは、エディタを使うことができますか。

3と8の項目の選択肢は、「まず自分でマニュアルを読んだり、機械を調べてみて対処方法を考える」、「自分では何もせずすぐ他人や専門家に頼む」、それ以外の選択肢は、「できる」、「できない」の二件法であった。

3) 情報機器の利用と所有 DTN、E-Mail、パソコン通信の利用の有無、ポケット・ベル、携帯電話、電子手帳の所有の有無。

## 結果と考察

### 情報遺漏のリスク認知結果

表1は、情報遺漏のリスク認知の結果を示したものである。情報遺漏への恐怖度の高い項目は次のようなものである。「自分のクレジットカード番号が他人に知られてしまうこと」、「電話が盗聴されること」、「成績ファイルの操作によって、自分の成績が書き換えられてしまうこと」、「自分の日記や手紙を他人に見られてしまうこと」、「知られたくない悩み・心配事が他人に知られてしまうこと」、「情報図書館(お金を払うと個人に関する情報が得られるシステム)に自分に関する情報が入れられること」、「自分一人でいられる時間・空間が奪われること」、「親しい人とだけいられる時間・空間が奪われてしまうこと」。

一方、恐怖度の低い項目は、「自分の所属しているクラブ・サークル名が他人に知られてしまうこと」、「自分の通っている学校名が他人に知れてしまうこと」、「自分の生年月日が他人に知られてしまうこと」、「家で呼ばれている呼び名が他人に知られてしまうこと」である。

将来起こるとする確率の高い項目は、「自分の留守中に、大学から成績表が郵送されること」、「自分の通っている学校名が他人に知れてしまうこと」、「自分の生年月日が他人に知れてしまうこと」等である。

生起の確率の低い項目は、「成績ファイルの操作によって、自分の成績が書き換えられてしまうこと」、「交換日記が他人に見られてしまうこと」、

表1 情報遺漏のリスク認知の結果

尺度項目	恐ろしさ	確率(%)
1 自分の電話番号が調べられ、家庭教師派遣会社などが電話をかけてくること	3.41	65.5
2 成績ファイルの操作によって、自分の成績が書き換えられてしまうこと	5.91	18.5
3 電話が盗聴されること	6.23	32.2
4 自分の日記や手紙を他人に見られてしまうこと	5.62	43.3
5 自分のポケットベルの番号を他人に知られてしまうこと	3.58	39.3
6 自分の受験の不合格が公表されてしまうこと	4.04	35.1
7 電話をかけた先の相手に自分の電話番号が知られてしまうこと	3.70	48.2
8 自分の体重や身長が他人に知られてしまうこと	3.39	54.2
9 ポケットベルのメッセージを他人に見られてしまうこと	3.48	42.3
10 E-mail (電子メール) の送り先の相手に自分のメールアドレスが知られてしまうこと	3.57	40.5
11 親しい人とだけいられる時間・空間が奪われてしまうこと	5.53	41.8
12 自分の携帯電話の番号が、他人に知られてしまうこと	3.97	31.3
13 自分の学籍番号が他人に知られてしまうこと	2.95	62.0
14 自分の生年月日が他人に知られてしまうこと	2.33	68.0
15 知られたくない悩み・心配事が他人に知られてしまうこと	5.60	37.8
16 匿名で利用できるコンピュータシステムで自分の名前が知られてしまうこと	4.95	30.9
17 交換日記が他人に見られてしまうこと	4.86	22.8
18 自分のクレジットカード番号が他人に知られてしまうこと	6.26	33.2
19 自分の住所が他人に知られてしまうこと	4.09	60.7
20 自分に送られて来た E-mail (電子メール) が他人に読まれてしまうこと	4.60	34.5
21 自分の名簿が公表されてしまうこと	3.51	55.2
22 他人にあまり知られたくない自分の趣味が他人にばれてしまうこと	4.77	32.1
23 自分の電話番号が他人に知られてしまうこと	4.16	62.4
24 自分一人でいられる時間・空間が奪われること	5.55	40.4
25 家で呼ばれている呼び名が他人に知られてしまうこと	2.40	56.3
26 自分の恋人 (好きな人) が他人に知られてしまうこと	3.43	59.2
27 自宅の電話番号が他人に知られてしまうこと	4.05	66.0
28 自分の留守中に、大学から成績表が郵送されること	3.31	83.1
29 自分が所属しているクラブ・サークル名が他人に知られてしまうこと	2.22	66.0
30 情報図書館 (お金を払うと個人に関する情報が得られるシステム) に自分に 関する情報がいられること	5.57	34.0
31 自分の通っている学校名が他人に知られてしまうこと	2.21	75.6
32 自分と彼氏 (彼女) との関係が他人に知られてしまうこと	3.30	57.0
33 自分の家の事情が他人に知られてしまうこと	4.10	40.9
34 自分のいった悪口がその相手に知られてしまうこと	5.45	44.5

「匿名で利用できるコンピュータシステムで自分の名前が知られてしまうこと」、「電話が盗聴されること」である。

情報遺漏に対する恐怖度と生起の確率との間には興味深い関係が伺われる。図1は、横軸に恐怖度縦軸に確率をとり、各事象項目の平均値をプロットしたものである。二つの変数の間には有意な高い負の相関関係が見られた ( $r=-.72$ )。すな

わち、恐怖度の高い項目は、生起する確率が低く見積もられ、逆に恐怖度の低い項目は、生起する確率が高いという具合に認知されている。こうした結果は、日常的に生じている事柄には慣れっこになってそれほど恐怖を感じていないが、起こりそうもない事柄は、もしその事柄が生じれば恐いという風に認知していることを示しているのかもしれない。

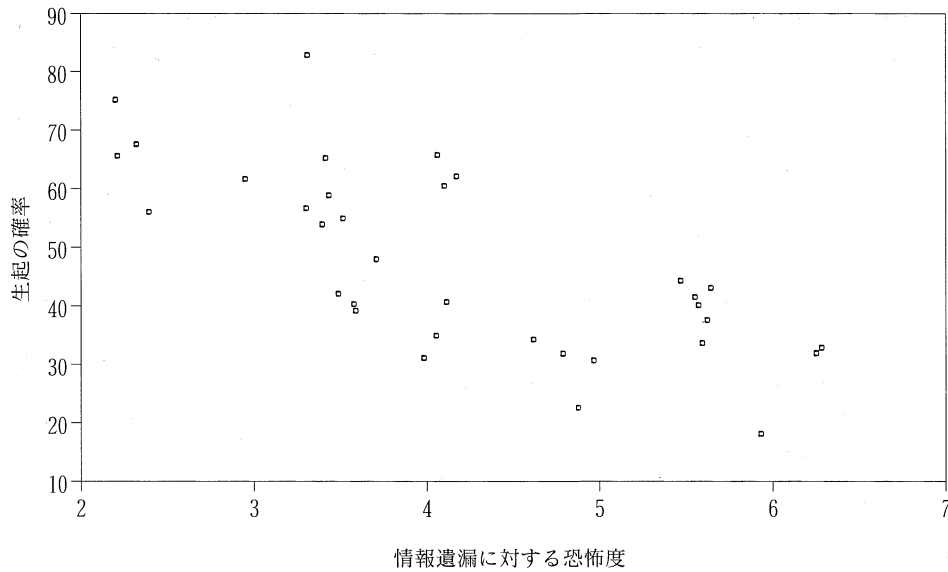


図1 情報遺漏に対する恐怖度と生起の確率との関係

情報遺漏の恐怖度の因子分析

情報遺漏に対するリスク認知の構造を明らかにするために因子分析による解析を試みた。まず情報遺漏に関する恐ろしさの評定結果を主成分法に

かけた。固有値の減衰状況を参考にして4因子を抽出し(説明割合48%)、バリマックス回転を行った。結果は以下の如くである。

項目	負荷量
第一因子—公的な個人生活の漏洩への恐怖	
10 E-mail (電子メール) の送り先の相手に自分のメールアドレスが知られてしまうこと	.74
21 自分の卒業名簿が公表されてしまうこと	.68
14 自分の生年月日が他人に知られてしまうこと	.67
13 自分の学籍番号が他人に知られてしまうこと	.67
27 自宅の電話番号が他人に知られてしまうこと	.65
7 電話をかけた先の相手に自分の電話番号が知られてしまうこと	.62
23 自分の電話番号が他人に知られてしまうこと	.64
19 自分の住所が他人に知られてしまうこと	.61
12 自分の携帯電話の番号が、他人に知られてしまうこと	.61
5 自分のポケットベルの番号を他人に知られてしまうこと	.58
29 自分の所属しているクラブ・サークル名が他人に知られてしまうこと	.57
1 自分の電話番号が調べられ、家庭教師派遣会社などが電話をかけてくること	.55
31 自分の通っている学校名が他人に知れてしまうこと	.55
9 ポケットベルのメッセージを他人に見られてしまうこと	.52
第二因子—私的な個人生活の漏洩への恐怖	
4 自分の日記や手紙を他人に見られてしまうこと	.68
6 自分の受験の不合格が公表されてしまうこと	.65
2 成績ファイルの操作によって、自分の成績が書き換えられてしまうこと	.63
17 交換日記が他人に見られてしまうこと	.61
34 自分のいった悪口がその相手に知られてしまうこと	.56
3 電話が盗聴されること	.49

20	自分に送られて来た E-mail (電子メール) が他人に読まれてしまうこと	.48
16	匿名で利用できるコンピュータシステムで自分の名前が知られてしまうこと	.44
8	自分の体重や身長が他人に知られてしまうこと	.41
第三因子—所属集団・人間関係に関する情報の漏洩への恐怖		
26	自分の恋人 (好きな人) が他人に知られてしまうこと	.70
32	自分と彼氏 (彼女) との関係が他人に知られてしまうこと	.67
22	他人にあまり知られたくない自分の趣味が他人にばれてしまうこと	.55
31	自分の通っている学校名が他人に知られてしまうこと	.53
25	家で呼ばれている呼び名が他人に知られてしまうこと	.52
29	自分の所属しているクラブ・サークル名が他人に知られてしまうこと	.51
33	自分の家の家庭の事情が他人に知られてしまうこと	.45
第四因子—プライバシー剥奪への恐怖		
24	自分一人でいられる時間・空間が奪われること	.68
23	自分の電話番号が他人に知られてしまうこと	.55
19	自分の住所が他人に知られてしまうこと	.51
11	親しい人とだけいられる時間・空間が奪われてしまうこと	.51
15	知られたくない悩み・心配事が他人に知られてしまうこと	.48
30	情報図書館 (お金を払うと個人に関する情報が得られるシステム) に自分に関する情報が いれられること	.42
18	自分のクレジットカード番号が他人に知られてしまうこと	.36

### 性別に見たリスク認知

第三因子である所属集団・人間関係に関する情報の漏洩の因子を除いて、すべての因子で女性の方が男性よりも情報遺漏に対して相対的に強い恐怖を示すことが明らかになった。こうした結果は、情報の漏洩に対して女性の方が危機感を強く抱いていることを物語っている。こうした原因の一部として、女性の方が男性に比べて弱い立場にあること、あるいは、日常生活でも、いたずら電話や無言電話の被害者といった経験があること等の背景要因の存在が考えられる。

### 情報機器利用能力との関係

情報機器利用能力とリスク認知の恐怖度の側面との間にはどのような関係があるのだろうか。相関分析の結果、第二因子である私的な個人生活の漏洩への恐怖因子と負の有意な関係があることが明らかになった ( $r=-.19$ ,  $df=198$ ,  $p<.01$ )。また、第三因子である所属集団・人間関係に関する漏洩への恐怖因子とも有意な関係がある ( $r=-.13$ ,  $df=198$ ,  $p=.07$ )。こうした結果は、情報機器の利用能力の高い人々は、私的な個人生活や所属集団や人間関係についての情報遺漏にそれほど恐

怖感を抱いていないことを示している。換言すると、情報機器の利用能力の低い人々は、不安感や恐怖感が高いといえる。逆の解釈を行えば、恐怖感の高い人々は情報機器を利用しない、だからその結果として、能力が低いのかかもしれない。相関関係の存在から、因果関係の推測はできないが、今後この点について究明の必要があろう。

ただし、この結果は男子学生についてのみあてはまる。男女別に同様の分析を試みると、女子学生では情報機器利用能力とは無相関である。それに対して、男子学生の場合は、第三因子である所属集団・人間関係に関する漏洩への恐怖因子と有意な関係がある ( $r=-.27$ ,  $df=68$ ,  $p<.05$ )。こうした関係になぜ性差が存在するのかは今のところ明らかではないが、今後の課題となるだろう。

### 情報機器の利用と所有の実態との関係

携帯電話、電子手帳、ポケットベルの所有や電子メールやパソコン通信の利用と情報遺漏への恐怖との間にはどのような関係が見られるのであろうか。リスク認知の恐怖度の各因子との相関係数を計算すると、携帯電話や電子手帳の所有とリスク認知の第二因子との間には負の有意な関係が見

られた ( $r=-.29$ ,  $df=198$ ,  $p<.001$ )。携帯電話や電子手帳を所有している学生は、私的な個人生活情報の漏洩に対して恐怖を抱いていない。逆にそうした物を持っていない学生は、恐怖感が高いことを示している。更に男女別で相関を分析すると、女子学生では、リスク認知の各因子といかなる情報機器の利用と所有とも関係が見られなかった。それに対して、男子学生は、携帯電話や電子手帳の所有とリスク認知の第二因子との間には負の有意な関係が見られた ( $r=-.31$ ,  $df=68$ ,  $p<.01$ )。更に、ポケットベルの所有とリスク認知の第四因子との間にも同様の負の有意な関係が見られた ( $r=-.24$ ,  $df=68$ ,  $p<.05$ )。

### 結論と今後の課題

大学生を対象とした調査で、情報遺漏に対するリスク認知を測定する尺度を新しく開発した。リスク認知は、情報遺漏事象に対する恐怖度と確率度の二つの側面から測定された。両者の関係は通常のリスク認知においては、恐怖度の高い事象は生起の確率も高いという、正の関係が観察されるのだが、本研究では負の関係が見られた。情報遺漏事象で生起の確率の高い事象に対して恐怖度が低く、逆に確率の低い事象に対する恐怖度が高いという興味深い知見が得られた。また、情報遺漏の恐怖度は男性よりも女性の方が高いこと、恐怖度と情報機器利用能力、所有との間には、男性は有意な負の相関関係があること等が明らかになった。

本研究の問題点であるが、探索的研究という性格の故に、本報告書の調査対象者となったサンプルが特定大学の限られた学部 of 学生であったので、こうした結果を一般化できないということである。今後の課題として、幅広い人々を対象としたランダム・サンプリングによる研究が必要であろう。現在年齢集団にバラツキのある幅広い人々を対象とした調査を行っている。

### 引用文献

岩田 紀 1987 日本人大学生におけるプライバシー志向性と人格特性との関係 社会心理学研究 第3巻 第1号 11-16.

川上善郎 1996 メディアリテラシーが作り出す「持てる者」と「持たざる者」 川浦康至他 メディアサイコロジー 富士通ブックス

Slovic, P. 1987 Perception of risk. *Science*, 236, 280-285.

鈴木裕久・川上善郎・杉山あかし・加藤隆雄・藤井義久 1992 「情報機器利用能力尺度」作成の試み

平成3年度文部省科学研究成果報告書 pp. 69-94.

郵政省 1985 人間と高度情報化を考える懇談会 最終報告

付記：本研究は、財団法人大川情報通信基金平成8年度研究助成によって行われた。

A social psychological study of the risk perception of  
a leakage of information in a computer-mediated society (1)  
—Development of a scale for measuring the risk  
perception of a leakage of information—

**ABSTRACT**

The purpose of this study was to develop a scale for measuring the risk perception of a leakage of information. The subjects were 198 university students. The risk perception was measured by the 'fear' dimension and the 'probability' dimension of various types of a leakage of information. The results indicated that the relationship between fear and probability was negatively correlated. Female students felt more fear about a leakage of information than did male students. The correlation between the fear dimension and the media use capacity was negatively related for male students.

**Key Words:** a computer-mediated society, risk perception, leakage of information